

厚生労働科学研究費補助金(免疫アレルギー疾患予防・治療研究事業)
総合研究報告書

成人喘息診療ガイドライン実践プログラムによる治療の実践に関する研究

分担研究者 土橋 邦生 群馬大学医学部保健学科 教授
研究協力者 堀江 健夫 前橋赤十字病院呼吸器内科 副部長

研究要旨

群馬大学医学部附属病院、前橋赤十字病院に通院中の喘息患者17人を対象に、成人喘息診療ガイドライン実践プログラムに沿って治療を適正化した場合の、重症度・QOLに与える効果をアンケートにより検討した。プログラムに沿って吸入ステロイドを減量した2例は、みな成功した。治療をステップアップした15例中11例で重症度・QOLとも改善した。適正化にも関わらず悪化した2例は、いずれも、調査期間中に感冒を患ったためであった。以上より、実践プログラムに沿った治療の適正化は、重症度・QOL改善に有効であった。

A. 研究目的

外来通院中の喘息患者を対象に、成人喘息診療ガイドライン実践プログラムに沿って、治療を適正化することによる治療効果およびQOL改善を調査する。

B. 研究方法

群馬大学医学部附属病院、前橋赤十字病院に通院中の喘息患者を対象に、成人喘息診療ガイドラインに沿って、治療を適正化した。適正化前および適正化後1-3か月後に重症度判定とアンケートによるQOL調査を行った。対象は、総数17人、年齢は29-89歳、男性8人、女性9人であった。アンケート調査であり、口頭で同意を得た。

C. 研究結果

17人中11例は何らかの抗原に対しRAST陽性であった。

ステップにあわせ吸入ステロイド減量したものの2例、他の15例は、いずれもステップに合わせて治療を強化した。このうち、吸入ステロイドを開始したのは8例、増量したのは5例、プレドニゾン内服開始1例、抗LT拮抗剤とテオフィリン徐放性剤を加えたものが1例であった。

1) 減量: 2例とも3か月以上安定しておりステップダウンのため吸入ステロイドを減量したが、悪化しなかった。

2) 増量: 15例中

①悪化2例: ステップに合わせて吸入ステロイドを増量した1例と経口ステロイドを追加した

1例であったが、治療期間中に感冒を患いステップに変化は無いものの、患者のQOLは悪化した。

②不変2例: いずれも吸入ステロイドを増量した例で、ステップ、QOLとも変化なかった。

③改善11例: 11例は、ステップ、QOLとも改善した。このうち、8例は吸入ステロイドを新たに追加した症例であった。2例は吸入ステロイド増量であった。1例は、吸入ステロイド量は変えずに抗LTとテオフィリンを加えた。

D. 考察

悪化例はいずれも感冒によるものであり、重症度やQOLに与える感冒の影響は極めて大きいとおもわれる。ガイドライン実践プログラムに沿って、治療吸入ステロイドを減量した2例は、2例とも成功した。また、ステップアップした、15例中11例で症状およびQOLが改善した。特に吸入ステロイドの開始、増量が効果的であった。

E. 結論

成人喘息診療ガイドライン実践プログラムに沿って、治療を適正化することは、喘息の治療効果およびQOL改善に有用である。

Ⅱ. 研究成果の刊行に関する一覧表

書籍

著者氏名	書籍名およびパンフレット名	出版社名	発行年月	ページ
須甲松信	アレルギー診療施設事例集	光写真印刷(株)	平成18年10月	397
須甲松信	アレルギー診療施設事例集<追補版>	光写真印刷(株)	平成19年2月	45
大久保公裕	コメディカルが知っておきたい 花粉症の正しい知識と治療・セルフケア	(株)協和企画	平成19年1月	13
秀道広 古江増隆 大路昌孝 相原雄幸 湯田厚司 深川和己 須甲松信	プライマリケア版 蕁麻疹・血管性浮腫の治療ガイドライン	(株)協和企画	平成19年1月	10
宮本昭正 須甲松信	一般医のための喘息治療ガイドライン2007	(株)協和企画	平成19年3月	29
山本昇壯	アトピー性皮膚炎Q&Aーコメディカルの患者指導のためにー	(株)協和企画	平成19年3月	22

著者氏名	論文タイトル名	書籍全体の編集者名	書籍名	出版社名	出版年	ページ
秀道広	抗ヒスタミン薬・抗アレルギー薬	矢崎義雄 監修	治療薬 Up-to-Date(2007年版)	メディカルレビュー社	2007	pp497-500
秀道広	ガイドラインにおける蕁麻疹の治療指針とは?	秀道広、宮地良樹	皮膚科診療最前線シリーズ じんましん最前線	メディカルレビュー社	2007	pp128-131
秀道広	XII 皮膚のアレルギー疾患の新しい治療 7. 自己免疫性蕁麻疹の新しい治療	片山一朗、古川福実	目で見るアレルギー性皮膚疾患	南山堂	2007	pp442-444

雑誌

発表者氏名	論文タイトル	発表誌名	巻号	ページ	出版年
大田 健	ピークフローメーターの使用感についてのアンケート調査	Journal of Japanese Society of Hospital Pharmacists	41	723-725	2005
大田 健 足立 満	成人喘息患者におけるサルメテロール/プロピオン酸フルチカゾン配合剤とテオフィリン徐放製剤及びプロピオン酸フルチカゾンの併用療法の臨床的比較	アレルギー・免疫	12	922-936	2005

Okuda M Ohkubo K	Comparative Study Of two Japanese rhinoconjunctivitis quality-of-life questionnaires	Acta Oto-Laryngologi ca	125	736- 744	2005
大久保 公裕	アレルギー性鼻炎の QOL に ついてー抗ロイコトリエン 剤の有効性ー	日記食会報	56	194- 196	2005
今井 透 大久保 公裕	2005 年のスギ花粉症に対す るラマトロバンと抗ヒスタ ミン薬の併用効果 ーQOL 調査ー	耳鼻咽喉科展望	48.6 12 月	427- 438	2005
Okubo K Gotoh M	Inhibition of the antigen provoked nasal reaction by second-generation antihistamines in patients with Japanese cedar pollinosis.	Allergology International	55	261- 269	2006
Okubo K Ogino S Nagakura T Ishikawa T	Omalizumab is effective and safe in the treatment of Japanese cedar pollen-induced seasonal allergic rhinitis.	Allergology International	55	379- 386	2006
Kameyoshi Y, Tanaka T., Mihara S, Takahagi S, Niimi N, Hide M.	Increasing the dose of cetirizine may lead to better control of chronic idiopathic urticaria, an open study of 21 patients.	Br J Dermatol	157	803 -804	2007